

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26381118

研究課題名(和文) 社会的困難の集中する地域において自立をめざす若者の支援に関する理論的・実証的研究

研究課題名(英文) Theoretical and empirical research on support for youth living in local communities with social difficulties

研究代表者

木戸口 正宏 (KIDOGUCHI, Masahiro)

北海道教育大学・教育学部・講師

研究者番号：90405093

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、地域経済の疲弊が著しく、貧困・社会的格差に基づく不利が集中している都市の典型事例であるとともに、生活保護受給世帯など、困難を抱える子ども・若者への先進的な自立支援を行っている北海道釧路市を主なフィールドとして、1) 子ども・若者が社会的自立の過程で直面する課題や困難の実態を明らかにするとともに、2) そうした困難を抱える若者への支援について釧路市における実践等を通して、その意義や到達・課題を具体的・実証的に明らかにする、3) 以上を踏まえて、複雑で様々な困難を伴った若者の「学校から社会へ」の移行を支えうるような教育実践・自立支援を理論的・実践的に構想することに取り組み、一定の成果を上げた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to clarify the problems and difficulties of children and youth in transition from school to work, especially those living in local communities with various social difficulties, and to verify the attainment and significance of supportive practices for children and youth with difficulties, especially those performed in Kushiro City and East Hokkaido Area. In this study, I elucidated the theoretical and practical framework useful for designing and practicing effective support for children and youth with social difficulties.

研究分野：教育学

キーワード：教育学 自立支援 移行研究 格差・貧困 若者・青年研究

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 90年代後半以降の社会的な構造変容を背景に、若年労働者の雇用は、この20年間、非正規化・不安定化・断片化の度を強めてきた。そうしたなかで、少なくない若者が、離学後、経済的に自立することはおろか、生活保護の受給対象となるような厳しい水準での生活を余儀なくされるとともに、「学校から社会への移行」にかかわる見通しを持つことが難しい状況におかれていた。

(2) その一方、移行をめぐる厳しい状況を生きぬくなかで、若年者自身による自生的なコミュニティ形成の試み(中西・高山 2009、乾 2013)や「居場所づくり」を核とした子ども・若者に対する多様な支援の取り組みもまた新たな展開を見せていた。

若年者の自立をめぐるこのような状況は、先進諸国に共通するものであったが、その変化をどのように評価するか、その中で子ども・若者に対してどのような支援が必要なのかについては、自立の向かう先である「大人」像をどのように捉えるのかを含め、きわめて論争的な状況にあった。

(3) このような社会状況の下、申請者は、科学研究費補助金基盤研究(C)「社会的困難の集中する地域における若年者の移行過程と自立支援に関する実証的研究(課題番号23531102)」の助成を得て、基幹産業の衰退や再編成を土台とする地域社会の構造変容と、その下での子どもの成長・発達課題と困難の内実を明らかにするとともに、その課題と正面から向き合い、彼らの成長や発達を支援する教育実践のあり方について実証的な調査研究を積み重ねてきた。あわせて「高卒者への経年的な聞き取りに基づく「学校から社会へ」の移行過程に関する実証研究」、「若年者の教育・職業の移行過程とキャリア形成に関するコーホート調査」、および「若者支援政策の評価枠組み構築に向けた日欧比較研究」の三つの共同調査にかかわり、移行過程の困難および社会的自立にかかわる当事者の主体的意識のあり方、および若年者の移行を規定する構造的特質(とりわけ地域特性・地域間格差の諸特徴)の解明について、一定の知見を得てきたところであった。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究は、以上見てきたような学術的背景、及びその下での申請者のこのような調査研究の蓄積に基づき、より緊急度を増した若年者の実態にそくした教育実践(学校教育・社会教育の双方を含む)の創造や若年者の自立支援施策の策定に貢献することを目的として行われたものである。

(2) 具体的には、若年者が「学校から社会

へ」の移行過程において直面するさまざまな課題や困難を見通した上で、彼らの複雑で長期的な移行を支える教育実践・自立支援を構想することが最終的な目的となるが、併せて、子ども・若者が「大人」になることの「意味」について理論的・実践的に考察することにも取り組むこととなった。調査研究の主たるフィールドは、地域経済の疲弊が著しく、貧困・社会的格差に基づく不利が集中している都市の典型事例であるとともに、生活保護受給世帯など、困難を抱える子ども・若者への先進的な自立支援を行っている北海道釧路市およびその周辺地域とした。

## 3. 研究の方法

(1) 当事者への聞き取り、具体的には、北海道釧路市「生活保護自立支援プログラム」の一環として取り組まれている「高校進学希望者学習支援プログラム」事業、そこからさらに発展的に派生したNPOの若者支援事業に着目し、福祉行政の担当者やNPO職員・学習支援ボランティア、学習会に参加している当事者(中学生)、事業経験者(高校生・社会人)への聞き取りを行い、釧路市における子ども・若年者の自立支援の現状と課題について明らかにすることを目指した。

(2) 文献資料の収集、先行研究や調査にかかわる基礎資料の収集および分析。とりわけ、調査対象地域(釧路市)における最新の進路構造を集中的に把握するために、公的な統計調査や行政による政策文書等を重点的に収集・更新し分析を行った。

(3) 統計資料等の分析。上記(2)で得られた基礎データに加えて、補助資料として、研究分担者として参加した、他の共同研究のデータや調査知見を適宜活用し、より多面的な視点から、釧路・道東地域における地域特性を踏まえた、若者支援の実践枠組を検討・構想することを試みた。具体的には研究分担者として参加した「若者の教育とキャリア形成に関する調査 詳細分析と国際比較」(代表:乾彰夫 2014~2018実施)において得られた、若年者の移行に関する地域特性・地域間格差の諸特徴のデータおよび国際比較データの活用を通して、北海道、とりわけ釧路市における若年者移行の特性(社会的困難が集中する地域における共通性と差異)を明らかにすることを試みるとともに、「若者支援政策の評価枠組み構築に向けた日欧比較研究」(代表:平塚真樹 2012~2016実施)にも研究分担者として参加し、諸外国における若者支援政策およびユースワーク実践の実情に学びつつ、日本各地における若者支援実践の到達および課題を踏まえ、釧路・道東地域における若者支援実践の枠組みを構想することを目指した。

#### 4. 研究成果

本研究の成果は、大要以下の通りである。

(1) 調査対象地域である北海道釧路市および道東地域の経済状況および若年者の進路動向、雇用状況の把握のために、公的な統計データの収集・更新・分析を行ない、一定の知見を得た。また、こうした知見については、全国学会や調査対象地域の福祉・教育関係者が参加する学習会等で、適宜報告を行い、研究成果の還元を行った。分析作業を通して、改めて子ども・若者の社会的自立を支える場としての地域社会の重要性とともに、そうした地域が成立する諸条件が失われつつある現状の課題、およびその再建が急務であることが浮かび上がってきた。

(2) 釧路市「高校進学希望者学習支援プログラム」(Zっと!Scrum)について、「学習支援事業」の先進例としての意義と課題を分析し、この事業が、単なる学習支援・進学支援の枠を超えて、参加した子どもたちの自尊感情の回復を支えるとともに、子どもたちを支える多様な大人たちのネットワークを豊富化し、さらにはそのような関係形成の当事者として、子どもたち自身をエンパワーする、当事者の「生活全体を支える重層的な支援」の場となってきたことを明らかにした。また事業開始から10期目を迎えた同事業について、これまでの歩みを整理するとともに、生育歴の中に困難を抱える子ども・若者を支援するために、今後どのような施策や取り組みが求められるかについて、これまでの研究成果を踏まえて一定の提起を行った。

(3) 東京都内の普通科高校卒業者に対する経年的な聞き取りをベースに、単著の論文を執筆・発表した。論文では「大人になること」を当事者がどのように経験し、またそれを見通しているのか、そこにはどのような困難があり、また当事者は何に依拠してその困難を乗り越えようとしているのか、について論じるとともに、「成人期」の把握をめぐる国際的・国内的な理論動向の整理を試み、新たな知見を得ることができた。またその際、「大人への移行は個人化・個別化し、従来のように共通の像はもはや描けない」とする論を批判し、現在においても若者たちの多くが「離家・就業・家族形成」といった「移行の三つの側面」に関わって、自身の「成長」を評価・認識していることを明らかにするとともに、従来の青年期に比して、「就業」が必ずしも移行の全体構造を引っ張る軸とはなっておらず、移行の形態が複雑化していることを明らかにした。

(4) 「若者の教育とキャリア形成に関する調査」(YCSJ)に研究分担者として参加し、そこで得られた知見をもとに、他の共同研究

者とともに国際学会に参加し、主として不安定な移行過程にある若者たちへの聞き取りをベースに、彼らがどのような困難に直面しているのか、その背景には学歴・職業履歴・ジェンダー・家族関係・友人関係・地域性など、移行にかかわるどのような要因が存在しているのか、彼ら自身はその困難をどのように捉え、意味づけ、それと向きあおうとしているのか、というテーマで報告を行った。また、ここで報告・発表した内容を土台に、若者たち、(とりわけ移行の困難を抱えている者たち)が「働くこと」をどのように経験しているのか、そのことは彼ら・彼女らが「学校から社会へ」の移行を果たすにあたってどのようなものとして受け止められているか、こうした「働くこと」にかかわる若者の経験から、求められる支援のあり方や必要な制度保障はどのようなものか、等について分析を行い、共同執筆の著作として公刊した。あわせて、早期離学者の学校から仕事への移行をめぐる国際比較のワークショップに参加し、不安定な移行状況にある若者たちの状況の異同について最新の知見を得るとともに、移行支援において求められる視点についてのアイデアを得ることができた。これらは今後新たな調査研究を行う際に参照しうる重要な知見になると考えられる。

(5) 「若者支援政策の評価枠組み構築に向けた日欧比較研究～「社会的教育学」援用の可能性」に研究分担者として参加し、国内外の若者支援の実践について最新の知見を得るとともに、その分析枠組に関する調査研究を行った。取り組みを通して、地域経済の衰退や人口流出など、さまざまな課題を抱える地域における子ども・若者の社会的自立にむけた支援において、改めて当事者である子ども・若者の声を丁寧に聞くことと、そうした当事者性を活かした関係性を支援者と子ども・若者が創り上げていくことの重要性を確認することができた。

(6) 以上(1)～(5)の内容を含む、これまでの研究成果を、報告冊子「社会的困難の集中する地域において自立を目指す若者の支援に関する理論的・実証的研究(平成26年度～平成28年度 科学研究費助成事業 基盤研究(C) 研究成果報告書)」としてまとめ、公開するとともに、これまで調査に協力していただいた方々に配布し、意見交換の機会を得ることができた。ここで得た意見や指摘は、今後の新たな調査・研究の展開において大変有用なものとなった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5件)

木戸口正宏、学生の生き方を問う教職科目、

教育科学研究会『教育』、査読無、No.862、  
かもがわ出版、2017年、67-72頁  
木戸口正宏、釧路市「Zっと! Scrum」  
の試み、教育科学研究会『教育』、査読無、  
No.841、かもがわ出版、2016年、67-72  
頁  
木戸口正宏、社会的教育学の視点から見た  
釧路市「高校進学希望者学習支援プログラ  
ム」(「Zっと! Scrum(ずっと!スク  
ラム)」)の試み、若者援助・政策と Social  
Pedagogy 研究会、若者援助におけるユ  
ースワークの場とプロセスの専門性と公共  
性(科研報告集)、査読無、2016年、DVD  
媒体のためページ表記なし  
木戸口正宏・南出吉祥・芳澤拓也、第六部  
第1章 YCSJ 面接調査の概要と、基本的  
な問題意識について、日本教育学会特別課  
題研究「若者の教育とキャリア形成に関す  
る研究会」編、「若者の教育とキャリア形  
成に関する調査」最終調査結果報告書、査  
読無、2014年、264-270頁  
木戸口正宏、働きながら生きる 高卒後の  
若者たちの「成長」、教育科学研究会『教  
育』、査読無、No.821、かもがわ出版、2014  
年、45-50頁

## 〔学会発表〕(計 2件)

木戸口正宏・河合隆平・越野和之・丸山啓  
史、障害のある子どもの生活・養育困難と  
特別支援学校の教育・福祉的機能、日本教  
育学会第73回大会、2014年  
KIDOGUCHI, Masahiro and YOSHIZAWA,  
Takuya and MINAMIDE, Kissho, The Variant  
Actuality of Young People in Precarious  
Transitions in Late Modern Japan-Based on  
the Interviews with 51 Young People, XVIII  
International Sociological Association (ISA)  
World Congress of Sociology, 2014

## 〔図書〕(計 4件)

玉井康之/北海道教育大学釧路校教師教育  
研究会編、木戸口正宏他著、子どもの“総  
合的な能力”の育成と生きる力、北樹出版、  
2017、268頁  
乾彰夫・中村高康・本田由紀編、木戸口正  
宏他著、危機のなかの若者たち、東京大学  
出版会、2017、424頁  
大宮勇雄・川田学・近藤幹生・島本一男編、  
木戸口正宏他著、どう変わる?何が課題?  
現場の視点で新要領・指針を考えあう、ひ  
となる書房、2017年、144頁  
田中孝彦・佐貫浩・久富善之・佐藤広美編、  
木戸口正宏他著、講座 教育実践と教育学  
の再生 別巻 戦後日本の教育と教育学、  
かもがわ出版、2014年、319頁

## 6. 研究組織

## (1)研究代表者

木戸口 正宏 (KIDOGUCHI, Masahiro)  
北海道教育大学・教育学部・講師